

【書評】

關浩和著『ウェッピング法—子どもと創出する教材研究法—』

(明治図書, 2003) 1,860円

馬野 範 雄
(大阪府教育センター)

關浩和氏は、現在広島大学附属小学校に勤務され、社会科授業の実践的な研究に取り組まれている。關氏は、有田一正氏の授業実践に感銘を受け、長年にわたりその手法を分析し、ご自身の授業に積極的に取り入れてこられた。しかし、授業改善を進めていく中で、次のような思いをもたれた。

「多くの子どもと接し、授業実践を重ねるごとに、氏の取り組む教材研究法が、教師から子どもへのトップダウンの手法であり、子どもが『学ぶ』という視点からは、少しずつ違和感を感じるようになってきた」

そんな問題意識の中で、ウェッピング法に出会われた。

「ウェッピング (Webbing) 法とは、インターネットのWWW (World Wide Web) のWebと同じ『クモの巣』という意味で、コンピュータ・ネットワークの視点から導き出された手法である」と、關氏は定義している。

そして、学問体系の論理に、子どもの論理を組み込むための方法として、子どもの興味・関心を基にして、トピックを次々と展開させていくウェッピング法が有効であると考え、これを社会科授業に活用した教材研究法を提案している。

本書のプロットは、次のようになっている。

- I なぜ、ウェッピング法なのか
- II ウェッピング法の基本的な視点
- III ウェッピング法の分類
- IV ウェッピング法による教材研究
- V 総合的な学習にシフトする授業づくり
- VI ウェッピング法における評価

ウェッピング法は、中核になる事象やことば (シンボル) をもとに、子どもたちの知識やイメージを引き出していく手法であるが、その目的に応じて使い分けていくことができる。

關氏は、ウェッピング法について、活用目的から次のように分類している。

- ①イメージ抽出型
- ②学習問題発見型
- ③事実発見・分析型
- ④事実比較・関連型
- ⑤学習整理・発展型

このように、ウェッピング法は問題解決的な学習過程のどの場面でも、活用することができる。したがって指導者は、子どもたちの主体的な学びを具現化させるために、学習過程のどの場面でウェッピング法を活用し、子どもたちの意識やイメージを表現させるのか、単元全体の構成の中から考えておく必要がある。

本書では、単元全体の流れや子どもたちの作品を紹介しながら、次のような単元において、目的に応じたウェッピング法の具体的な活用法を示している。

- ◇中学年「わたしたちの地域」
- ◇第5学年「日本の産業」
- ◇第6学年「日本の歴史」
- ◇第6学年「日本の政治」等全11実践

子どもたちが主体的な学習活動を進めるためには、子ども自身が学習の全体像をイメージすることができ、自分の学習の位置づけを意識することが大切である。ウェッピング法は、学習の全体像を明確にするとともに、自分の学習の位置を視覚的に明確にすることができる。自分の学習の位置や方向を意識しながら学習に取り組んでいるとき、子どもたちは主体的な学習を進めていると言えるのである。

本書は、社会科の授業改善に取り組まれている先生方に、是非参考にしていただきたい一冊である。